

古代歌謡における敬語の実態とその特質

坂 本 元 太 郎

- 一 はじめに（意図および目的）
- 二 古代歌謡における敬語の実態
 - 1 『古事記』の歌謡と敬語
 - 2 『日本書紀』の歌謡と敬語
 - 3 『続日本紀』の歌謡と敬語
 - 4 『風土記』の歌謡と敬語
 - 5 『仏足石』の歌謡と敬語
- 三 古代歌謡における敬語の特質
- 四 附説 新古今集における敬語の実態
 - 1 『新古今集』と敬語
 - 2 『新古今集』にみられる敬語の特徴
 - 3 短歌と敬語をめぐる諸問題

はじめに（意図および目的）

本稿は古代歌謡の敬語を対象として、その使用の実体について調査をし、その特徴を考察しようとしたものである。上代における韻文は、歌謡として現在に伝えられているが、後で述べるように、日本語の敬語を知る上で極めて貴重な文献となっている。上代敬語の研究資料としては、いわゆる漢文体の文献がその主流を占めてはいるが、日本語としての敬語研究の資料としては、春日和男氏の所説――「漢字の原義において既に敬意を保有し、それと同じく表意的にわが敬語脈の上に乗せて訓ませたもの、またその用字を和文化しているもの、更には漢字の原義には別に敬意はなくても、それにわが敬語脈の訓をあてはめるべきもの、また敬語訓をあてはめるべき漢字はなくても、国文体に訓むばあい、敬語を補読したであろうもの」――（講座国語史5『敬語史』・「古代の敬語Ⅰ」所収）にみられるように、いくつかの様相が存在するので、ある程度は用字それ自体から待遇意識をうかがうことは可能であるにしても、日本語としての敬語のあり方を研究する対策としては厳密な意味で当を得ないものと言わねばである。

その点では、たとえば祝詞・宣命・古事記・日本書紀・風土記および万葉集などは、一部漢文体で書かれている「序」や「本文」または「題詞」を除外すれば、日本語の文章としては十分に研究資料となりうるものである。とりわけ、古事記・日本書紀・風土記・万葉集などにみられる歌謡は、一字一音式の仮名表記を原則とするものがほとんどなので、国語としての敬語の具体相を知る上で適当な文献と言えるのである。

那都久佐能 阿比泥能波麻能 加岐賀比爾 阿斯布麻須那 阿加斯豆杼富禮 (『古事記』・87)

夜酒瀾志斯 和餓於朋耆瀾能 訶勾理摩須 阿摩能椰蘇河礙 異泥多多須 瀾蘇羅烏瀾禮麼 豫呂豆餘珥 訶勾

志茂餓茂 知餘珥茂 訶勾志茂餓茂 知餘珥茂 訶勾志茂餓茂 訶志胡瀾豆 菟伽倍摩都羅武 烏呂餓瀾豆 菟

伽倍摩都羅武 宇多豆紀 摩都流 (『日本書紀』102)

以上のように一字一音の仮名表記であるとは言っても、次の例のように、必ずしもそうでないものもあり、漢文または変体漢文脈のもの(一)や活用語尾・助詞の省略(二)などの種々の表記がみられる。

闇夜有者 宇倍毛不來座 梅花 開月夜尔 伊而麻左自常屋 (『万葉集』・1452)

戀家口 氣長者乎 可合有 夕谷君之 不來益有良武 (『万葉集』・2039)

韻文の中でもとくに短歌となると、五音七音の音数律による理由から、または「四の三」で後述するような事情から、敬語の使用が抑圧され、それと連動して敬語自体が不統一で任意的になりがちなこともある。その実態を知る上で考慮しなければならないが、それが歌謡となると、短歌に類似した制限を持ちながらも、新古を問わず短歌以上に敬表現が多用されている。以上の点に留意しながら、古代歌謡の敬語の実態を考察してみたいと思う。

二

古代歌謡における敬語の実態

古代歌謡の所収文献は、主として古事記と日本書紀とにおける、いわゆる『記紀歌謡』が中心となるが、本稿で

は以上の二つに、続日本紀・風土記および仏足石に含まれた歌謡をも含めて考察の対象とした。歌体は周知のようにその種類も多く、また体裁や形式の面で整わぬものも多い。短歌・旋頭歌・片歌・長歌・仏足石歌が中心となるが、五音と七音の音数律を基本としながらも、それを大きく逸脱した歌も散見され、一方ではまた、上記各体の複合した歌などもあって単純ではない。したがって歌体ごとの敬語調査に重点を置かないで、歌謡全体を総括して考察を試みた。調査に当って、以下の基準を設けて統一を図った。

* 重出する歌謡は、最初のもののみを掲げ、ほかは省いた。

* 体言敬語とくに皇室敬語（天皇・王・皇神・大君・皇女・大皇・君・みこ・みことナド）は使用頻度が高いが考察の対象とした。

また「吾君（あぎ）」や「せ（兄）」の君の類も体言敬語として処理した。

* 接辞関係の敬語の中に、いわゆる（讃）美称語の類をも含め品詞は名詞として処理した。

* 「聞こす」と「聞かす」の場合は、前者は音韻変化から考えて一語の敬語動詞とし、後者は「聞く」の未然形に「す」（助動詞・尊敬）が添ったものとみて、二語として処理した。

* 「な（寝）す」「け（着）す」などの類も、尊敬の助動詞「す」が添って音韻変化を起こしているので、一語の敬語動詞とした。

* 補助動詞は、品詞としては動詞として処理した。

なお本文は『古代歌謡』・日本古典文学大系（岩波書店）によった。また敬語の用例と種類・品詞については、敬語には必要に応じて傍線を施し、種類は尊敬語・謙譲語・美称語に分けて考え、品詞は動詞・助動詞・名詞（接辞の添うたものも含む）に区分した。敬表現の形式については、別語方式（交替形式）と接語方式（添加形式）に分けて考察を加えた。

1 『古事記』の歌謡と敬語

2							歌番号	
立たせれば	寝(な)す	在通はせ	在立たし	聞こして	聞かして	神のみこと	敬語用例	
○	○	○	○	○	○	○	尊敬語	種
							謙讓語	類
							美称語	
	○			○			動詞	品
○		○	○		○		助動詞	詞
						○	名詞	
	○			○		○	別語方式	表現形式
○		○	○		○		接語方式	
<p>*「寝(な)す」は本来は「ヌす」・音韻変化あり。</p> <p>*「聞こす」は音韻変化あり。</p> <p>*接辞的な語であったが、尊敬語になったと考えられる。</p>							補	説

古代歌謡における敬語の実態とその特質

		3							
御衣 [°] (みけし)	御衣 [°] (みけし)	神のみこと	聞こし	寝(な)さむ	玉手	真玉手 [°]	死せたまひ	神のみこと	立たせれば
●○	●○	○	○	○			○	○	○
					○	●○			
			○	○			○		
									○
●○	●○	○			○	●○		○	
○	○	○	○	○				○	
●	●				○	●○	○		○
<div>*「ミ」は美称ともとれるが、人間に関係して用いられているので、尊敬の意とした。</div> <div>*音韻変化あり。</div> <div>*音韻変化あり。</div> <div>*「マ」「タマ」 敬語の枠を拡大し敬語に有縁なものとして処理した。</div>									

5						4			歌番号	
寝(な)せ	玉手	真玉手	持たせらめ	男にいませば	神のみこと	妻のみこと	泣かさまく	妹のみこと	敬語用例	
○			○	○	○	○	○	○	尊敬語	種 類
									謙讓語	
	○	●○							美称語	
○				○					動詞	品
			○				○		助動詞	
	○	●○			○	○		○	名詞	詞
○				○	○	○		○	別語方式	
	○	●○	○				○		接語方式	表現形式
*音韻変化あり。						*「ミコト」は元来「ミ言」「ミ事」の意で、それが「ミコト命」(ご命令・お言葉)の意となり、さらにそれを言う「人」に転じた。神・妹・妻に下接した場合は尊敬語となる。			補 説	

*四段・補助動詞の用法。
「男にあれば」の敬体。

9		7	6						
乞はさば	乞はさば	君	渡らす	み谷	御統	御統	項がせる	豊御酒	たてまつらせ
○	○	○	○				○	●	●○
				○	○	○		○	
									○
○	○		○				○		●
		○		○	○	○		●○	
		○							○
○	○		○	○	○	○	○	●○	●
		* 女性から男性へ。	○ 動詞「ウナグ」に「ス」の下接した形。					* 「たてまつる」は「飲食スル」意の尊敬語の用法。	

	38	30	28					27	24	歌番号		
	御酒	吾君 ^{あき}	真ほろば	着(け)せる	君	大君 ^お	やすみしし	日の御子	着(け)せる	君	敬語用例	
種	○	○		○	○	●○	○	○	○	○	尊敬語	
											謙讓語	
			○								美称語	
品				○					○		動詞	
							○				助動詞	
詞	○	○	○		○	●○		○		○	名詞	
		○		○	○	●			○	○	別語方式	
表現形式	○		○			○	○	○			接語方式	
補説	*「ギ」は「君」の「ミ」を省略して連濁になったもの。			*天皇・皇子などの尊称。 *枕詞。「ミシ」は「見ル」の尊敬語。「シ」は助動詞。 *「大(オホ)」は接辞。「大君・大嬢・大臣・大殿」などがある。					*音韻変化あり。	*女性から男性へ。		

40			39						
御酒	御酒	御酒	飲(を)せ	御酒	献(まつ)り	豊寿ぎ	石立たす	常世にいます	御酒
○	○	○	○	○			○	○	○
					○				
						○			
			○		○			○	
							○		
○	○	○		○		○			○
			○		○			○	
○	○	○		○		○	○		○
			<p>* 動詞の用法。「に」は格助詞。</p> <p>* 「ホキ」は「ホク」の名詞形。</p> <p>* 「奉る」(マツル)に同じ。</p> <p>* ここでは「飲む」の意。</p>						

48				47		43	42			歌番号	
親 (ち)	食 (を)せ	聞 こし	大御酒 ^{い・ほ}	佩 かせる	御 子	誘 ^{いざ} ささば	逢 はしし	逢 はしし	い ませばや	敬語用例	
○	○	○	●○	○	○	○	○	○	○	尊敬語	種類
										謙讓語	
										美称語	
	○	○							○	動詞	品詞
				○		○	○	○		助動詞	
○			●○		○					名詞	表現形式
○	○	○							○	別語方式	
			●○	○	○	○	○	○		接語方式	
<p>*「オホミ」は「オホ」よりも敬度が高い。「オホ」は本来は美称であるが「オホミ」となると尊敬となる。</p> <p>*「聞こす」は音韻変化あり。</p> <p>*「ち」は男性（ここでは天皇）に対する敬称。</p>						<p>*諸説あり。動詞「イザス」に助動詞「ス」の添ったものとみる。</p>				<p>*ここでは「行く」の尊敬語。</p>	補説

62		60	57				52	51	49
兄(せ)の君	申(まを)す	御諸	大君 [°]	広ります	照ります	真椿	下らす	君	御酒
○		○	●○	○	○		○	○	○
	○								
						○			
	○			○	○				
							○		
○		○	●○			○		○	○
○	○		●					○	
		○	○	○	○	○	○		○
*「麻袁須」とある。「まうす」となるのは古代末期からである。			*「いまし」はともに補助動詞の用法。					*ここでは「命」または「天皇」を指している。	

歌番号		63	65	66	67	68	69	
敬語用例		言へせこそ	参来れ	大君	聞こさば	王	織ろす	御製料
種	尊敬語	○		●○	○	●○	○	○
	謙讓語		○					
類	美称語							
	動詞		○		○		○	
品	助動詞	○					○	
	名詞			●○		●○		○
表現形式	別語方式		○	●	○	●	○	
	接語方式	○		○		○	○	○
補説		*「言はせこそ」の転音。 *「マウ」の連用形に「来」の已然形の添うたもの。		*音韻変化あり。		*「大君」と同様に扱った。		*「織ろす」の転音。 *美称ともとれるが尊敬と解した。

90			88	87	86	85	73	72	
真玉	真枝	真枝	君	踏ますな	大君 [。]	問はさね	御子	問ひたまへ	問ひたまへ
			○	○	●○	○	○	○	○
○	○	○							
								○	○
				○		○			
○	○	○	○		●○		○		
			○		●				
○	○	○		○	○	○	○	○	○
				*禁止表現。		*希求表現。		*「たまへ」は補助動詞の用法。	

97					96	94		92		歌番号	
大君 [°]	やすみし ^し	申(まを)す	大前	み吉野	御手	玉垣	御諸	御諸	真玉	敬語用例	
●○	○		○		○		○	○		尊敬語	種類
		○								謙讓語	
				○		○			○	美称語	品詞
		○								動詞	
	○									助動詞	詞
●○			○	○	○	○	○	○	○	名詞	
●		○								別語方式	表現形式
○	○		○	○	○	○	○	○	○	接語方式	
*「オホ」は美称から転じ尊敬に解した。 *「麻衰須」とある。										補説	

	100					98			
真椿	日の御子	瑞玉 [○] 盞 [●]	棒 [○] が [●] せる	御門	真木	遊ばし ^し	大君 [○]	やすみし ^し	いまし
	○		●	○		○	●○	○	○
			○						
○		●○			○				
			○						○
			●			○		○	
○	○	●○		○	○		●○		
			○				●		○
○	○	●○	●	○	○	○	○	○	
<p>*美称にも解される。 *「捧グ」に助動詞「ス」の添うたもの。</p>									

	103					101					歌番号	
	やすみしし	取らす	取らせ	取らせ	取らすも	たてまつらせ	豊御酒	御子	照りいます	広りいまし	敬語用例	
	○	○	○	○	○	●	●	○	○	○	尊敬語	種 類
						○					謙讓語	
							○				美称語	
						○			○	○	動詞	品 詞
	○	○	○	○	○	●					助動詞	
							●○	○			名詞	表現形式
						○					別語方式	
	○	○	○	○	○	●	●○	○	○	○	接語方式	補 説
											*「います」はともに補助動詞の用法。	

112	109		107	106	105	歌番号	
み 山	御 子	大 ° 君 •	大 ° 君 •	大 工 匠	大 宮	数語用例	
	○	●○	●○		○	尊敬語	種類
						謙讓語	
○				○		美称語	
						動詞	品詞
						助動詞	
○	○	●○	●○	○	○	名詞	
		●	●			別語方式	表現形式
○	○	○	○	○	○	接語方式	
						補	
						説	

2 『日本書紀』の歌謡と敬語

24			15			6	3	歌番号	
御木 (け)	渡 らす	御木 (け)	御 酒	御 酒	御 酒	君	渡 らす	敬語 用例	
	○		○	○	○	○	○	尊敬語	種 類
								謙讓語	
○		○						美称語	
								動詞	品 詞
	○						○	助動詞	
○		○	○	○	○	○		名詞	
						○		別語方式	表 現 形 式
○	○	○	○	○	○		○	接語方式	
						*古事記7参照。		補 説	

	62	60	59	56	53	51			47	歌番号	
	やすみしし	聞かす	捕らさね	御襲料	聞こさぬ	大君	大御船	取らせ	取らせ	君	敬語用例
種類	○	○	○	○	○	●○	●○	○	○	○	尊敬語
											謙譲語
											美称語
					○						動詞
	○	○	○					○	○		助動詞
				○		●○	●○			○	名詞
					○	●				○	別語方式
表現形式	○	○	○	○	○	●○	○	○		接語方式	
補説											
*古事記71参照。 *古事記68参照。希求表現。 *古事記66・67参照。 *音韻変化あり。 *古事記57参照。											

75				74		68	63		
立 _し	聞 _か して	大 _君	申 _(まを) す	大 _前	撫 _だ す	立 _し て	君	問 _は す	大 _君
○	○	●○		○	○	○	○	○	●○
			○						
			○		○				
○	○					○		○	
		●○		○			○		●○
		●	○		○		○		●
○	○	○		○		○		○	○
* 一本には「いまし」。				* 古事記97参照。 * 一本には「大君」。 * 「麻鳴須」とある。		* 「ナヅ」(下二段)に「ス」の添うたもの。音韻変化あり。		* 古事記72参照。	

82			78		75					歌番号	
御心	御心	御心	仕へ奉らむ	大君	奉らふ	大君	立たせば	います	立たし	敬語用例	
○	○	○		●○		●○	○	○	○	尊敬語	種
			○		○					謙讓語	
										美称語	
			○		○			○		動詞	品
							○		○	助動詞	
○	○	○		●○		●○				名詞	詞
			○	●	○	●		○		別語方式	
○	○	○		○		○	○		○	接語方式	表現形式
<p>*宝寿の寿詞である。 地の文に「室寿を為して曰りたまひしく」とあるので、厳密な意味では歌謡ではない。歌謡の場合は、 うたひしく・うたひたまひし</p>			<p>*接語方式ともとれるが、一語の動詞とした。</p>							補説	

83									
僕	御裔 ^{あたすゑ}	押磐の尊 ^{おしゐのたか}	治らしし	僕(やつこ)	賜はね	酒(おほみき)	御富	御寿 ^{みこと}	御心
	○	○	○		○	●○	○	○	○
○				○					
					○				
			○						
○	○	○		○		●○	○	○	○
○		○		○					
	○		○		○	●○	○	○	○
<p>*「家っ子」の意から転じた。 * 顕宗天皇の名宣り。(古事記参照)</p>					<p>* 補助動詞の用法。希求表現。 * 「酒」をオホミキと訓んでいる。 扱った。 などは表現されている。ここでは拡大して考え歌謡として取り扱った。</p>				

		96		94		93		90	88	歌番号		
見 (み) せ ば	御 諸	入 り 坐 し	真 木	玉 盃	玉 筥	御 帶	大 君	大 君	御 子		敬語 用例	
○	○	○				○	●○	●○	○	尊敬語	種 類	種
										謙讓語		類
			○	○	○					美称語		品
		○								動詞	詞	品
○										助動詞		詞
	○		○	○	○	○	●○	●○	○	名詞		表現形式
							●	●		別語方式	表現形式	補
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	接語方式		説
*原文「彌細麼」、「見(め)す」ではない。		*補助動詞の用法。										

102				101		100	97		
立たす	隠ります	大君 [°]	やすみしし	振らす	立たし	振らすも	御帯	大君 [°]	やすみしし
○	○	●○	○	○	○	○	○	●○	○
	○								
○			○	○	○	○			○
		●○					○	●○	
		●						●	
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
*補助動詞の用法。									

104		103				102				歌番号
君	臥 <small>こ</small> せる	使はす	大君 [°]	真鋤 ^も	真蘇我よ	歌附きまつる	仕へ奉らむ	仕へ奉らむ	御空	敬語用例
○	○	○	●○							種
						○	○	○		類
				○	○				○	類
	○					○	○	○		品
		○								品
○			●○	○	○				○	詞
○	○		●			○	○	○		表現形式
		○	○	○	○				○	表現形式
*下二段動詞「コユ」に助動詞「ス」の添うたもの。音韻変化あり。		*ほめことばで枕詞。				*「附く」に諸説あり。 ①動詞説、②名詞説（ウタヅキ） ①ととれば「まつる」は補助動詞となり、「歌を献じ申し上げる」の意。②ととれば「まつる」は動詞の用法で「献上する」の意。ここでは②と解した。				補説

	123		122		112	108	107	105	
出でませ	君	君	御言	御狩	懲ます	取らす	通らせ	籠らせ	臥せる
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○									○
					○	○	○	○	
	○	○	○	○					
	○	○							○
○			○	○	○	○	○	○	
*補助動詞の用法。			*難訓歌である。						

128	127	126	124			歌番号	
真葛原	御子	み吉野	刀自	出でまし	刀自	敬語用例	
	○		○	○	○	尊敬語	種類
						謙譲語	
○		○				美称語	
						動詞	品
						助動詞	
○	○	○	○	○	○	名詞	詞
			○	○	○	別語方式	
○	○	○				接語方式	表現形式
			*「出でます」の名詞形。			補説	

3 『続日本紀』の歌謡と敬語

4			3			1	歌番号	
長くいまして	大君 [°]	やすみしし	たてまつる	豊御酒 [°]	御孫の命 [°]	仕へ奉らめ	敬語用例	種
○	●○	○	○	●	●○			
						○	謙讓語	類
				○			美称語	
○			○			○	動詞	品
		○					助動詞	
	●○			●○	●○		名詞	詞
○	●		○		●	○	別語方式	
	○	○		●○	○		接語方式	表現形式
*動詞の用法。			*尊敬語「召し上がる」の意。				補	
							説	

16	15
玉匣	玉匣
○	○
○	○
○	○

5 『仏足石』の歌謡と敬語

4		3	1	歌番号	
濟 <small>わた</small> したまはな	御足跡	御足跡	御足跡 <small>みあ</small>	敬語用例	
○	○	○	○	尊敬語	種類
				謙讓語	
				美称語	
○				動詞	品詞
				助動詞	
	○	○	○	名詞	表現形式
				別語方式	
○	○	○	○	接語方式	
*希求表現。				補説	

10	9				8			5		歌番号
栄残りいませ	まうさむ	捧げ	譲りまつらむ	御足跡	参てむ	坐す	御足跡	人に坐せか	救ひたまはな	敬語用例
○				○		○	○	○	○	尊敬語
	○	○	○		○					謙譲語
										美称語
○	○	○	○		○	○		○	○	動詞
										助動詞
				○			○			名詞
		○			○	○		○		別語方式
○	○		○	○			○		○	接語方式
*補助動詞の用法。	*補助動詞の用法。 原文「麻字佐牟」とある。				*「参」は上代「て」または「用言」に続けて用いられた。				*希求表現。	補説

20	17	16		14		13		12	11
大王 ^{おほきみ}	大御足跡 ^{おほみそと}	廻りまつれば	御足跡	敬ひまつり	御足跡	仕へまつれり	写しまつれり	参到りて ^{まゐりて}	御足跡
●○	●○		○		○				○
		○		○		○	○	○	
		○		○		○	○	○	
●○	●○		○		○				○
●						○		○	
○	●○	○	○	○	○		○		○
		*補助動詞の用法。		*補助動詞の用法。		*補助動詞の用法。		*「マキイタリテ」の約音。	

三

古代歌謡における敬語の特質

重複した歌謡を避けながら、古代歌謡の敬語について考察を加えたが、以下に述べるようにいくつかの特徴が見られた。短歌と異なり歌謡に敬語が多用される現象は、すでに指摘されたことではあるが、とくに古代歌謡となると、万葉短歌と並んで敬語量が豊富である。考察の対象とした五つの文献において、敬語を含む歌謡は、一一四首で、

	古事記	日本書紀	続日本紀	風土記	仏足石
歌謡数	112	88	8	20	21
敬語を含む歌謡数	51	39	4	6	14

* 「古事記」と重出する歌（四〇首）は「日本書紀」から除いた。

となっていて、特に公的な場で詠まれた歌や新年の寿歌、または仏足石歌にみられるような阿弥陀仏の礼賛などの歌に、高い比率で敬語が用いられている。その特徴的な事からを要約すると次のようになる。

古代歌謡における敬語の実態とその特質

Ⅰ 体言群（接辞を含む）の敬語の発達が著しい。とくに身分差を負担している名詞の多いことがあげられる。これは万葉集なども含めた古代敬語全体に共通すること、

大君 大王 王（おほぎみ） 大前 天皇（すめらみこと） 王（みこ） 命 尊（みこと） 君 親（ち）
吾君（あぎ） 兄の君

などのほかにも「刀自」「出でまし」といった尊敬語が見える。その一方では、体言敬語を構成する接辞関係の発達も特徴的で、「真」「御」「玉」「豊」「大御」「豊御」「大」「瑞」の語が尊敬語または美称語として、かなりの量で用いられているが、これは言霊信仰に有縁な古代人の心理や意識の言語的投影の所産であろうか。歌謡に徴するかぎり謙讓語は「奴・僕」の二語が見られるに過ぎなく、尊敬語に対して極端に少なくなっている。

Ⅱ 用言群（動詞・補助動詞）の敬語は、語彙的には一七種を数え、尊敬語と謙讓語がほぼ均衡している。

尊敬語 聞こす 寝^{*}（な）す 給ふ（賜ふ） います 臥^{*}（こや）す 着^{*}（け）す 飲（を）す ます 撫^{*}だす
謙讓語 まつる たてまつる 申（まを）す 捧ぐ 仕へまつる 参来 参到る 参

基本的な敬語語彙と考えられるものばかりであるが、尊敬語の中には助動詞「す」（四段型）が添加した結果、転音現象を招いたもの（*印の語）も見える。

Ⅲ 助動詞関係の敬語は「す」（尊敬・四段型）一種である。敬表現の形式としては、接語方式に属するが、使用度数が極めて多いのは、一音節語であるためと考えられる。

Ⅳ 敬語の種類別における使用度数の点では、尊敬語が圧倒的に優勢を占め、謙讓語は極端に少なくなっている。

また種類・品詞・表現形式ごとの使用度数は、次のとおりである。

種 類		品 詞		表 現 形 式	
尊敬語	謙讓語	美称語	動 詞	助動詞	名 詞
250	25	41	64	65	87
				別語方式	接語方式
				97	118

尊敬語の使用度数が多いのは、主として接辞関係による場合と、体言群の尊敬語による場合が多いためと考えられる。つまり、体言群と用言群の尊敬語、それに接辞関係の一部が尊敬語を構成しているのに対して、謙讓語は体言群が二語、用言群が八語なので、そうした事情が使用度数の差異となって表われたものとも考えられる。

V 敬表現の形式から考えると、若干ながら別語方式よりも接語方式が優位に立っている。この現象は万葉集の短歌にも見られたことであるが、それは接語方式に属する語に、「ミ」「マ」「ス」(助動詞)などの一音節語、「オホ」「タマ」「トヨ」「マス」(動詞)などの二音節語が発達していたという事情があったことと関係が深い。また語によっては別語による言いかえの不可能なものもあるし、補助動詞の用法が多く見られることも、その一因であって、以上の複合した要因が接語方式の優位をもたらしたものと考えられる。

歌謡(韻文)における敬語以上に、文章(地の文)中に用いられている敬語は、その種類(語彙)も豊富で頻度も高い。一例を示すと、

また天皇、その弟速総別はやふさわけの王おほきみを媒なかつとして、庶妹女鳥の王むすめを乞ひたまひき。ここに女鳥の王、速総別はやふさわけの王に語りたまひしく、「大后おほきさきの強きによりて、八田やちだの若郎女わかしらをも治めたまはず。かれ仕へ奉らじ。吾は汝が命いのちの妻みめになりなむと思ふ」と言ひて、即ち相婚みあひましき。ここを以て速総別はやふさわけの王、復かへりごと奏うけしたまはざりき。ここに天皇、直に女鳥の王の坐す所に幸でまして、その殿戸とのの闕かの上に坐しき。ここに女鳥の王、機はたに坐して服織はたらせり。

（『古事記』）

物語性を持ったこの文章は、登場人物の人間関係を軸として展開するかたちをとっているので、どうしても敬語量が多くなる。つまり、人間関係を物語に持ち込むことが敬語増を招く結果となったのである。

古代歌謡の世界にも敬語が相当量使用されている事実を考え合わせると、古今集や新古今集と様相を異にした、いわゆる歌謡と地の文章における敬語の未分化現象がみられると考えると考えてよいであろう。今後の課題として、神楽歌・催馬楽・東遊歌・風俗歌・雑歌などの歌謡における敬語の実態について考察を加えたいと考えている。

注 坂本元太郎「古典短歌における敬語の実態と特質」・北海道武蔵女子短期大学紀要・第十三号所収。

参考文献

- 山路平四郎・『記紀歌謡評釈』（東京堂出版）
春日 和男・『古代の敬語Ⅰ』・『講座国語史5・敬語史』（大修館書店）
吉田 金彦・『記紀・万葉集の敬語』・『敬語講座②・上代・中古の敬語』（明治書院）

西宮 一民・「上代敬語と現代敬語」・『講座日本語学・9・敬語史』（明治書院）
土橋 寛・『古代歌謡全注釈』（古事記編・日本書紀編）・（角川書店）

四

附説 新古今集における敬語の実態

1 『新古今集』と敬語

鎌倉時代において最初に成立した勅撰和歌集である新古今集は、二〇巻からなり、諸本によって多少の異同はあるが、約一九八〇首の短歌を収録している。本稿の「新古今集における敬語の実態」に関する調査は、すでに発表した「古典短歌における敬語の実態とその特質―短詩型文学としての短歌における敬語をどう考えるか―」^{（注1）}という研究の延長線上に位置するもので、万葉集・古今集・それに伊勢物語と竹取物語所収の短歌における敬語の実態をふまえて、新古今集における具体的な敬語調査を目的としたものである。さらに万葉集・古今集・新古今集に至る古典短歌と敬語のかかり合いと両者をめぐる諸問題にも連動させながら以下考察をすすめてみることにする。

敬語は、体言関係の敬語と用言関係の敬語が中心をなしているが、それに助動詞関係の敬語と接辞関係の敬語をも含めて考察の対象とした。

A 体言関係の敬語

名詞と代名詞を含めた体言群の敬語は、その種類自体は多くなく三語にとどまる。しかし使用度数は接辞関係群

古代歌謡における敬語の実態とその特質

古代歌謡における敬語の実態とその特質

の敬語と並んで圧倒的に多くなっている。

敬語	君 ^(注2) (きみ)						天皇(すべらぎ)	御幸(みゆき)
所収歌番号	1722	1377	1177	884	733	222	749	869
	1740	1396	1180	885	736	482	1478	1437
	1757	1426	1187	886	738	616		1451
	1758	1486	1204	896	739	664		1452
	1761	1514	1205	902	741	710		1454
	1793	1544	1207	978	745	711		1456
	1857	1576	1208	997	779	713		1460
	1858	1577	1215	1056	811	724		
	1866	1587	1235	1058	821	725		
	1883	1606	1290	1068	822	726		
号	1891	1628	1342	1085	847	729		
	1960	1634	1349	1123	849	730		
	1978	1635	1368	1160	867	732		
計	78						2	7

* 右の中で「君がよ」という表現をとるもの13例（710 713 724 730 732 733 738 741 745 1577 1634 1757 1761）。
 もの2例（711 736）。「君がちとせ」という表現をとるもの1例（725）となっている。

* 右の「御幸」の中で、869の歌は「御幸」と「深雪」、1452 1460の歌は「御幸」と「御（み）雪」の掛詞になっている。

B 用言（動詞）関係の敬語

動詞（補助動詞の用法も含む）関係の敬語は、わずかに五例・三語を数えるにすぎない。その中で動詞の用法が3、補助動詞の用法が2となっていて、いずれも尊敬語である。

敬語	所収歌番号	敬語	所収歌番号	敬語	所収歌番号
ます	333 1208 1628	たまふ	1921	みそなふ	1922

* 1628 1922 の歌は動詞の用法、333 1208 1921 の歌は補助動詞の用法である。

* 動詞関係の敬語群は数が少ないので次に示しておく。

333 秋はぎの咲き散る野べの夕露にぬれつつきませ夜はふけぬとも
 1208 衣手に山おろし吹きて寒き夜を君きまさずばひとりかもねん
 1628 こけのいほりさしてきつれど君まさでかへるみ山の道の露けき

古代歌謡における敬語の実態とその特質

1921 阿耨多羅三藐三菩提の仏たちわが立つ杣に冥加あらせたまへ
 1922 のりの舟さして行く身ぞもろくの神も仏も我をみそなへ

C 接辞関係の敬語

体言の敬語は、Aに掲げたように、体言自体が敬意を負担している場合と、接辞が冠して敬意を表わす場合とがある。接辞は尊敬・丁寧の敬意を負担するのがふつうであるが、本稿では敬語を拡大して考えて、いわゆる美称語（讚美称語）を構成する接辞をも敬語の枠内に入れて処理した。^(注3)

接 辞	み 吉 野	み 熊 野	み 山	み 雪
所 収 歌 番 号	1	1048	235	9
	70	1907	477	107
	100		492	1452
	121		615	1453
	133		616	1460
	483		663	
	588		900	
	991		928	
	1616			
計	9	2	8	5

み 野	114 685	み 代	734 753 1477 1486 1874	み 狩	685 686 687 1050
	2		5		4

* 次の歌はいずれも「深山」と解して除外した。

27
167
170
192
360
394
439
442
1521
1523
1623
1628
1835

* 477 の歌「衣うつねやまの庵のしばくもしらぬ夢路に結ぶ手枕」の「ねやま」の「ね」は「み」の誤りと考えた。

* 1616 の歌「花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみよしのの山」における「みよしのの山」の「みよ」には「見よ」を懸けてある。

* 525 の歌の「三室」はここでは除外して考えた。

以上のほかに、「み垣」728・「みかげ」1877・「みむろ」285・「み法」1933・「み手」1925・「み舟」1868・「み前」1915・「み国」1968「おほみ田」1893の例がそれぞれ一つずつ見え、これをも加えて合計44が「み(名詞)」——一例のみは「おほみ(名詞)」という結果となった。次にいわゆる美称語(讚美称語)について考察してみると、

ト ヨ	ミ ヅ	マ		タ マ		
		真 砂	真 葛が原	玉 くしげ	玉 梓(の)	玉 柏
豊 みてぐら	瑞 垣	745	440 1030	1428	232 857 861 1248	230
			真 榊		玉 椿	玉 ざさ
			677		750	265
					玉 垣	玉 水
					1891	3 1366 1367

四種類の接辞が用いられ、総数で19例となっている。

D 助動詞関係の敬語

語	所収歌番号
る	1251

* 助動詞関係の敬語は一例のみなので、次に示しておく。

青柳のいとみだれたる此の比はひとすぢにしも思ひよられじ
 なお右の歌の「れ」(る)の語性について、「自発」の意とも解せられるが、「あなたは私のことを一途に思いになっている
 のではあるまい」の意にとつて、ここでは「尊敬」としておく。

* また助動詞「る」を含む次の歌は、いずれも「受身」であるので除外して考えるべきである。

1271
 1316
 1325
 1392
 1684
 1755
 1873

2 『新古今集』にみられる敬語の特徴

約一九八〇首の中で、体言関係の敬語を含む歌が87、用言関係の敬語を含む歌が5、接辞関係の敬語を含む歌が63、助動詞関係の敬語を含む歌が1となっていて、計一五六の歌に敬語が使用されている。その中には、

685 みかりする交野のみのにふる霞あなかままだき鳥もこそたて
 1208 衣手に山おろし吹きて寒き夜を君きまさずばひとりかもねん

古代歌謡における敬語の実態とその特質

1486 幾千代と限らぬ君がみよなれど猶をしまるべきの明ほの
1628 こけのいほりさしてきつれど君まさでかへるみ山の道の露けき

などのように、二語の敬語を含み持っている歌もある。(1628の歌の「み山」は、その詞書から「深山」の意。) 新古今集全体を通しての著しい傾向は、接辞群をも含んだ体言敬語が主流を占めているのに対して、動詞(補助動詞も含む)や助動詞の敬語が圧倒的に少なくなっていることである。こうした傾向は、すでに古今集にみられたことでもあるので、短歌における敬表現のありかたを追認した結果となっている。

動詞群の敬語にしても、「たまふ」(1921)、「みそなふ」(1922)の二語は、巻二〇「釈教歌」所収のもので、経文を題詠する歌が多いという性格から考えて、やや特殊な例として取り扱うべきである。また「ます」は三例あるが、その中の一例(1628)のみは「恵慶法師」の歌として採られているのに対して、他の二例(333・1208)は万葉集から採録されたものであって、この点で新古今時代の敬語語彙とは断じがたい。333の歌は万葉集の2252の歌と全く同じもので、1208の歌も万葉集の3382の類歌と見るべきもので、ただ第二句が異なっているにすぎない。

333 秋はぎの咲き散る野への夕露にぬれつつきませ夜はふけぬとも
2252 秋葦子之 開散野邊之 暮露 沾尔乍來益 夜者深去軀 (万葉集)
1208 衣手に山おろし吹きて寒き夜を君きまさずばひとりかもねん

以上の点から、「ます」は古今集以来ほとんど用いられなくなり、短歌に関するかぎり化石的にその痕跡をとどめるに至ったということができよう。

接辞関係の敬語の中で優勢を占めている「み」は、尊敬や丁寧の意を負担しているが、接辞の性質上、極めて任意性の強いもので一様ではない。たとえば「み吉野の」「み吉野は」「み熊野の」などは、むしろ五・七の音数律に關係するものとみられ、短歌における制約を受けている事情が看取される。1465・1475・1602・1618の歌などでは、「よ

しのの」と「み」を外したかたちをとり、また詞書には「くまのにまゐりて」としながらも、歌には「みくまのの」とある(1907)などから考えても理解できるのである。^(注4)

一方、詞書には相当量の敬語が使用され、短歌とは全く反対の現象を見せている。一例をあげると、

尊敬語 たまふ おほせらる ごらんず おはす おはします たまはす のたまはす めす おぼす

おほとのごもる つかはす 御時 御返し 御ひたひ 御前 御歌 御神楽 御供 御岳 行幸 ナド

謙譲語 つかまる つかうまつる たてまつる 申す まかる まゐる まうづ 奏す ナド

丁寧語 はべり

などの語を中心としている。これは短歌から文章への転移現象という側面のあることも否定できないが、万葉集から古今集そして新古今集に至る過程で、文章における敬語にくらべて、短歌における敬語がその制約を極端に

受けやすかった事情によるものであろうか。

敬表現は、その形式からみると次の二種類に要約できる。

(イ) 別語方式 (交替形式)

(ロ) 接語方式 (添加形式)

短詩型文学としての短歌は、スペースの制約から別語方式による敬表現の方が接語方式による敬表現よりも多用されるべきであると考えられるのであるが、その点をめぐって、新古今集における敬語について、方式と種類をまとめたのが次の表である。

敬表現の形式・敬語の種類一覧

- * 同一の語で語性の同じものは、一つにまとめてその数を示した。
- * 別語方式・接語方式は、それぞれイ・ロで表わした。
- * 尊敬語・譲讓語・丁寧語は、それぞれA・B・Cで表わした。
- * 美称語は便宜上丁寧語に含めた。
- * 活用語は終止形で示した。
- * 掛詞は両義それぞれを考察の対象とし、掛詞を含んでいる語には「・」印を付した。
- * 接辞関係敬語の種類には、その判断の微妙なものもあったが、今は表示のように考えた。

語	方式	種類	用例数	語	方式	種類	用例数
君	イ	A	78	み 手	ロ	A	1
すべらぎ	イ	A	2	み 舟	ロ	C	1
・み ゆ き	イ	A	7	み 前	ロ	A	1
ま す	イ	A	1	み 国	ロ	A	1
ま す	ロ	A	2	おほみ田	ロ	A	1
た ま ふ	ロ	A	1	玉 柏	ロ	C	1
みそなふ	イ	A	1	玉 梓	ロ	C	4
み 吉 野	ロ	C	9	玉 ざ さ	ロ	C	1
み 熊 野	ロ	C	2	玉 椿	ロ	C	1
み 山	ロ	C	8	玉 水	ロ	C	3
・み 雪	ロ	C	5	玉 垣	ロ	C	1
み 狩	ロ	A	4	玉くしげ	ロ	C	1
み 代	ロ	A	5	真葛が原	ロ	C	2
み 野	ロ	C	2	真 榊	ロ	C	1
み 垣	ロ	A	1	真 砂	ロ	C	1
み か げ	ロ	A	1	瑞 垣	ロ	C	2
み む ろ	ロ	A	1	豊みてぐら	ロ	C	1
み 法	ロ	A	1	る	ロ	A	1
別語方式5語(用例数89)・接語方式31語(用例数67)							
尊敬語 110・謙讓語 0・丁寧語 46							

右の表で理解されるように、別語方式5に対し接語方式が31となっていて、1対5の比を見せている。この点については、後の3で述べることにして、敬語の種類からみると、尊敬語・謙讓語・丁寧語の使用数が、110・0・46という結果になっている。著しい特徴は、尊敬語の多用に反して、謙讓語がゼロという事実である。記紀を中心とした前述の「古代歌謡」における用言群の謙讓語が22の使用度数となっており、また万葉集の短歌における用言群のそれが60さらに古今集の短歌における用言群のそれが、わずかに1例（申す）であることと考え合わせると、短歌における謙讓語の衰退ぶりが目を引く。

3 短歌と敬語をめぐる諸問題

古典短歌における敬語使用の実態については、万葉集（四二二二首）・古今集（一〇〇二首）・伊勢物語（二三二首）・竹取物語（一五首）を対象として、すでに論究したが、^{（注5）}本稿ではさらに新古今集にまで対象を拡大して調査してみたわけである。以下、既発表の論文と一部重複するが、万葉集と古今集における敬語の特質をまとめてみると、次のような結果となる。

万葉集

- I 敬語量は体言群の敬語や接辞（美称）群の敬語を除いてもかなり多量であること。
- II 品詞的には名詞が多く、動詞（補助動詞も含む）の使用量も多いのに反し、助動詞が比較的少ないこと。
- III 助動詞は尊敬の「す」が大勢を占め、尊敬の「る」は極めて稀なこと。

Ⅳ 敬表現に慣用的定型表現があること。

Ⅴ 敬表現の形式からみると、接語方式と別語方式とが、ほぼ2対1の割合となっていて、接語方式による場合が多いこと。

古今集

Ⅰ 敬表現が極端に減少し、万葉集と全く異なった様相を呈していること。

Ⅱ 品詞的には動詞（補助動詞も含む）や助動詞は著しく少なくなり、逆に接辞関係群の敬語が多用されていること。

Ⅲ 謙譲語は「申す」一例のみで、尊敬語は四例とも「ます」となっている点で異色であること。同時に万葉集での「ます」の多用ぶりに比較すると、その使用量の上で明らかに衰退していること。

Ⅳ 敬表現の形式からみると、接語方式が別語方式よりも多くなっていること。

以上の歴史的な流れの中に、新古今短歌を位置づけてみると、短歌における敬語のかかわり合い、または短歌と敬語のかかわり方が、より明瞭になってくる。敬語が社会関係や人間関係の反映として言語上定着した特殊な表現である以上、やはりその変遷には、下部構造としての社会組織や国家体制が介在していると見なければならぬ。万葉集では敬語にみられる待遇意識はかなり明瞭であるが、それは氏族制と律令制に支えられた社会であったことと有縁であり、それが敬語量の多さと連動していると考えられるのである。

それが古今短歌になると、敬語が激減するが、それは歌の中に対人関係を持ち込む必要がなくなったということ

とともに、それを詞書が負担して処理するという事情が生じてくると表裏するのである。古今集仮名序にあるように、当時の短歌は君臣関係の公的な場を反映するものではなく、私的な男女間の消息文として用いられていたことも敬語不要の一因であろうし、また現実の人間関係や身分差を投影させない、一種の平等意識の支配する世界であったという事情も見逃しえないであろう。とにかく短歌はその意味では一つの解放区であったと考えられるのである。

新古今短歌になると、この傾向はますます著しくなり、接辞関係の敬語群の多用と動詞敬語群の決定的な衰退という現象を見せるに至る。すでにここでは敬語による実質的な待遇意識が化石化し、次第に装飾敬語としての性格へ変質しつつあることを物語っている。一方、内容的に考えても、すでに古今集でもそうであったように、短歌内容それ自体が、自然や季節感を中心としたものに重点が置かれた結果、敬語はすでにその存在を主張する権利を失ったのだとみることもできる。かくして詞書における敬語量の増加と表裏して短歌における敬語不要という現象が著しく加速度化し、新古今短歌の敬語疎外という事実をもたらしたのである。見方を変えるならば、敬語量の減少化の過程は、そのまま短歌としての文学性と独自性を主張することにつながっていくと考えられるのである。

短歌はスペースが限られた世界であるだけに、接語方式による敬表現は望ましいものではない。ところが実態はむしろ別語方式がはるかに優勢を占めている。この点に関しては、すでに考察を加えたので再論は控えるが、短詩型文学であるから短歌に敬語が用いられることが少ないのだとする考えは、改めて別な視点から問い直されなければならぬ種々の問題を含んでいると言えよう。

注1 坂本元太郎・北海道武蔵女子短期大学紀要・第十三号 所収

注2 「君」は後には「公」とも書かれ、本来は天皇をはじめ高貴な人や高位な人に対する尊称として用いられた。接辞「オホ」を添えた「大君」はその典型である。その本来の用法が一般化、拡散化して対称（二人称）の代名詞となったと考えられる。

新古今集における「君」の用例は78例を数えるが、後鳥羽院や、一条院・後朱雀院・堀川院・斎院・後冷泉院を示すもの（739・811・821・847・1486・1606の歌）、また天皇を指すもの（849・1576・1635・1758・1857・1883・1891の歌）、親王や天孫・阿弥陀を指すもの（1544・1866・1960の歌）、中宮を指すもの（779の歌）、弁乳母を指すもの（822の歌）など極めて多様である。上記以外の歌は、女性から男性に、男性から女性に用いている場合が多い。896の歌のように、文武天皇の御陵を指している場合もある。

注3

美称語の扱いについては、これを敬語の枠に入れない考えもある。西宮一民氏は次のように考えておられる。「私は美称のマ・ミは敬語に入れない。同じく、味・酒・高・殿・高・知ル・太・祝詞・太・敷ク・玉・箆・豊・御酒・瑞などの、ウマ・タカ・フト・タマ・トヨ・ミヅは美称語として尊敬語の範疇には入れない。かかる美称語の多用は、言霊信仰の時代に流行したもので、それは尊敬とは別の觀念だと考えられる。」
とも、また

「一般的な敬避表現…中略…は敬語表現には入れない。それはまた、「真」ほか「味・高・太・玉・豊・瑞」等の美称語を敬語とは認めなかった…中略…に通ずる私の姿勢である。

（「上代敬語と現代敬語」・『講座日本語学・9・敬語史』・明治書院）

注4

「み雪」と接辞を冠した歌はわずかに5例にすぎない。「み雪」に「御幸」を掛けた1452・1460の歌を除いた大多数の歌はそのほとんどはリズムに関係すると考えられ「み」を冠していない。「み」を冠しない場合でも種々のタイプがあって、単独の用法のとき・熟語の場合・連体修飾語を伴ったときなどが考えられる。次の歌がそれに相当する。

古代歌謡における敬語の実態とその特質

注5	坂本元太郎・「古典短歌における敬語の実態とその特質」北海道武蔵女子短期大学紀要・第十三号	所収	667	1
			668	3
			669	4
			670	8
			671	11
			672	13
			673	18
			674	19
			675	20
			676	21
			677	22
			678	23
			679	24
			680	28
			681	30
			682	41
			683	50
			684	76
			687	79
			690	92
			693	98
			928	114
			929	118
			1022	134
			1216	135
			1436	136
			1440	388
			1441	588
			1460	657
			1579	658
			1580	659
			1665	660
			1693	661
			1694	662
			1890	664
			1912	665
				666

(昭和60年1月28日)